修士論文概要

「学校と NGO の連携による国際理解教育活動の教育的効果について」

井原淑雅
203D0040

《研究背景》

現代の教育現場では、無気力、規範意識の崩壊、目的意識の欠如や常に自分が主体であって、他人や関心のないことは受け入れようとしない子どもたちの姿勢が問題視されている。本研究ではそのような問題の根底には、子どもたちの日常生活において他者との関係が希薄化していることにあるのではないかと考えるのである。

私の勤務する藤ノ花女子高校では 1997 年よりＮＧＯと連携をとりながら、フィリピンへの支援や教育活動、スタディツアーを実施してきた。その結果、その活動に参加した子どもたちは、自分たちの生活が多様な関係の上に成り立っていることに気づくようになってきた。また、様々な事象に対して国際理解の視点を持って地球規模で考え、判断できる思考が育成されてもきた。さらに学校生活の中でも自己を振り返るとともに、将来に対する明確な目標を持って、意欲的に学習等に取り組むようにも変わってきた。つまり、フィリピン教育活動に参加した子どもたちは、フィリピン社会での生活体験や在日フィリピン人との交流がきっかけとなって、自分たちの住む世界を違う世界から眺め、自己を振り返ることができるようになってきたのである。その結果として、他者との関係の重要性に気づくようになってきたといえる。

《研究目的・方法》

本研究の目的は、現代の教育問題の根底として、子どもたちが他者との関係性を構築することができなくなっていることが問題であると考え、それが学校の閉鎖的、硬直的な体質からきているため、NGO との連携による国際理解教育活動を学校教育に導入することが、その問題解決のためには有効的であることを、具体的事例により考察することである。

研究方法としては、私の勤務する高校で実施しているフィリピン教育活動を整理し、活動を通じて蓄積された生徒の意識変化や行動変化を分析することによって、学校教育に NGO との連携による国際理解教育活動を導入することの教育的効果について考察した。

《論文構成》

目　次

第一章　研究背景・目的・方法
第二章　学校教育現場での国際理解教育
　第一節　近代教育と学校教育における現代的課題

（１）近代教育としての日本の学校教育
（２）現代社会と学校教育問題
（３）日本社会の変容と国際化
第二節　日本での国際理解教育
（１）ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）における国際理解教育の変遷
（２）日本の教育行政・教育政策における国際理解教育
（３）ユネスコ型国際理解教育と日本型国際理解教育
第三節　学校教育に国際理解教育を導入することの意義
（１）国際理解教育とは
（２）国際理解教育導入の背景
（３）国際理解教育の関連領域
第四節　学校教育現場における国際理解教育の現状
－藤ノ花女子高等学校の事例より－
（１）海外修学旅行・海外ホームステイ
（２）校内における国際理解教育活動

第三章　海外教育活動を中心とした国際理解教育
－藤ノ花女子高等学校の事例より－
第一節 フィリピンへの教育支援活動(第一期活動)
第二節 教育支援活動から教育活動・スタディツアーへの転換（第二期活動）
第三節 海外教育活動を導入することの意義
（１）スタディツアーについて
（２）本校におけるスタディツアーの意義
第四節 海外教育活動を通してみる現代社会と学校教育

第四章　ＮＧＯによる教育開発協力事業の展開
－CIWEST の事例より―
第一節 教育支援活動（第一期）
第二節 教育開発協力事業（第二期）
第三節 人的開発事業への取り組み
第四節 フィリピン社会におけるデイケアセンターの働き
（１）フィリピン社会におけるバランガイ
（２）バランガイにおけるデイケアセンター
第五節　CIWEST によるデイケアセンター開発
（１）リサール州アンゴノ市ロザリオ地区の事例
（２）リサール州アンゴノ市マハガンパラ地区の事例

（３）アクラン州カリボ市リバカウ地区の事例
（４）バタンガス州タナワン市マリキンポロ地区の事例
第六節　CIWEST による教育開発協力事業の開発的意義
（１）リサール州アンゴノ市ロザリオ地区の分析
（２）リサール州アンゴノ市マハガンパラ地区の分析。
第七節　バランガイの特性とデイケアセンター開発をする場合の注意点

第五章　学校教育活動と NGO 活動が連携することの効果
－藤ノ花女子高等学校と CIWEST の連携による具体的事例より－
第一節 学校教育における支援・ボランティア活動の取り組み
第二節 学校教育にとって、ＮＧＯとの連携による活動の教育的効果
（１）NGO との連携による学校教育活動
（２）NGO との連携による活動の教育的効果
第三節　NGO にとって、学校教育との連携による活動の開発的効果
第四節　学校教育現場における今後の課題および問題点
（１）教員意識と研修制度
（２）カリキュラム論と国際理解教育としてのフィリピン教育活動

終　章　まとめ
資　料
参考文献

《論文概要》

第一章では、本研究の研究背景、目的および方法について示した。

第二章では、現代の教育問題は、社会構造変化（産業構造や内なる国際化の問題など）や労働問題（終身雇用や年功序列制度といった従来型の雇用システムの崩壊）、学校の持つ体質的な問題（閉鎖性・硬直性）が関係するのではないかと考えた。その結果、学校教育と社会が求めるものが、近年は非常に乖離しているという結論に至った。すなわち、企業も即戦力を求めるような時代の中で、学業成績や学歴のみが進路決定の優位性や社会的地位を決定付けるものにはならなくなっている傾向にあるといえる。その影響が子どもたちの学習態度や意欲に反映され、外発的動機づけによる学習効力は著しく低下しているのである。つまり、従来の教師がまとまった知識を伝授し、生徒はその知識を蓄積する学習（パウロ・フレイレの「銀行型学習」）には、子どもたちも興味を示さなくなっているといえる。そのため、子どもたち自身が、自分たちを取り巻く現実世界を読み取り、問題を見つけ出すような学習（フレイレの「課題提起型学習」）が必要になっているのである。それには、学校の体質改善が求められるのであり、学習内容も経験を重視した課題提起型の学習が必要となる

のである。

また、現在の日本社会は「内なる国際化」の問題や情報通信の発展により、国境を越えて様々な分野が複雑に絡み合いながら急激な社会進行を遂げている。そのため教育もその変化に対応することの必要性に迫られ、中央教育審議会・臨時教育審議会・学習指導要領では、学校教育における国際理解教育の必要性を指摘している。また本研究がフィリピン社会から学習する国際理解教育活動であることから、国際理解教育の歴史的変遷を整理する意味で、ユネスコの示す国際理解教育と日本の行政が示す国際理解教育についての比較をした。また本研究での国際理解教育については、次のように定義した。

① 日常の多様な関係性に気づき、新たな関係性を再構築する。その構築された関係性を地球的規模で思考することができる能力の育成を図る。

② 既成概念を単純に受け入れるのではなく、自分なりの概念形成をおこなったうえで、論理的に自分なりの判断が下せる力を育成する。

③ 自らの日常生活を見直すことによって、今までとは違う視点から日常生活をとらえ直し、新しい生き方や考え方、モラルを持った自己の存在を考える態度の育成を図る。

最後に、本校で国際教育活動として取り組んでいる海外修学旅行と海外ホームステイなどについて、国際理解教育という観点から分析をしてみた。

第三章では「海外教育活動を中心とした国際理解教育」として、本校で実施しているフィリピン教育活動について、その活動目的の変遷と活動内容を整理した。そこでは、①対話学習　②体験学習　③社会・経済学習　④状況把握・判断学習　⑤歴史学習としての効果があることがわかった。ここでの学習は、「課題提起型」の学習になっているといえる。（第一段階の教育効果）

また、本校で実施しているスタディツアーに参加する生徒たちの帰国後の感想に、最近の日本社会では失いかけていると思われる人々の「温かさ・やさしさ」について、フィリピン社会では強く感じることができたと述べる者が多い。このように生徒が感じるのは、子どもたちの住む日本社会が、他者との関係性が希薄化した社会になっていることを意味しているのではないかと考え、その点について日本の社会構造上の変化と情報機器の発展、そして学校の閉鎖的・硬直的な体質という面から考察した。その結果、現代の学校教育で必要なことは、他者との関係性を構築するための学習を実施することである。そのためには「開かれた学校」作りと、それを実現するための「外部との連携」をどのように進めるかといった具体的な方法であるといえる。

第四章では「NGO による教育開発協力事業の展開」として、本校が国際理解教育活動を実施していくうえで連携をとっている、NGO 団体 CIWEST の活動内容について、時代と目的による変遷を整理した。さらに現在 CIWEST が積極的に実施しているフィリピンでのデイケアセンター開発について、フィリピンの地域社会構造とデイケアセンターの働きの点について整理した。その結果、初期の支援活動での経験から学んだことが、現在の教育開発協力事業の活動基盤を形成し、さらに現在の教育活動へと展開されていることがわかっ

た。

第五章では「学校教育活動と NGO 活動が連携することの教育的効果」として、学校教育では支援もボランティアもチャリティも学習もすべてボランティアでかたづけてしまい、多くは善意の言葉で学習を完結させてしまう。国内におけるこのような傾向は、海外活動ではより顕著になり、子どもたちを盲目にさせてしまっていると考える。

その点について本校でのボランティア活動の事例をひとつのモデルとして考察し、問題点を指摘した。そのうえで、国際教育開発協力事業を推進している NGO と学校での国際理解教育活動が連携することによる国際理解教育の学習効果を考察した。その結果、①リアリティの把握　②先入観、固定観念等の打破と防止　③日常生活、地域課題の受け入れ　④教科学習との一致といった、本活動を通しての第二段階の学習効果が確認された。

さらに NGO との連携による国際理解教育は、従来の教科指導や学校教育の枠を越えた社会や地球規模の問題に気づき、考え、解決する学習態度の育成を図ることができる。そこから常に他者との関係を意識し、視野に入れながら生活する姿勢が表れることによって、学校生活や日常生活などの面において他者との関係の重要性に気づく学習となるのである。（第三段階の学習効果）。

最後に結論として、本研究で示したように学校が NGO と連携をおこなうことによって、子どもたちは NGO の経験を生かしながら、直接自分たちを取り巻く現実世界を読み取り、そこから問題を見つけ出し、自ら解決しようとする意識を持った学習の機会が拡大されることになる。さらに、外部に広がった目は、新たな関係を構築することの必要性を感じ、実現していくこととなる。また、学校と NGO の連携による国際理解教育活動は、本研究の定義とした「既成概念を単純に受け入れるのではなく、自分なりの概念形成をおこなったうえで、論理的に自分なりの判断が下せる力を育成すること」や、「自らの日常生活を見直すことによって、今までとは違う視点から日常生活をとらえ直し、新しい生き方や考え方、モラルを持った自己の存在を考える態度の育成を図る」こともできる学習であるといえよう。

このように、NGO との連携による国際理解教育は、従来の教科指導や学校教育の枠を越えた社会や地球規模の問題に気づき、考え、解決する学習態度の育成を図ることができるのである。そこから常に他者との関係を意識し、視野に入れながら生活する姿勢が表れることによって、現代の子どもたちに見られる他人を意識しない、自己中心的な意識や態度に変化を与えていくと考えられる。このことは、学校と NGO との連携による国際理解教育活動を実施することによって、子どもたちの内面に変化が起こり、結果的に現代の教育問題を改善していくといった教育効果（第四段階）につながるといえる。

今後の課題としては、学校教育現場でより効果的に NGO との連携による国際理解教育活動を実施するためには、直接現場で指導する教員の意識や指導技術の向上のための研修制度の充実と学習活動としての座標軸を明確にするために、カリキュラムの研究と開発の推進が重要となってくるといえる。

学校とNGOとの連携による国際理解教育の教育効果

（第一段階）フィリピン教育活動への参加（体験・経験→学習）

①対話学習　②体験学習　③社会、経済学習

④状況把握、判断学習　　⑤歴史学習

（第二段階）生徒の直接経験＋NGOの経験（学習→気づき）

①リアリティの把握

②先入観、固定観念の打破と防止

③日常生活、地域課題の受け入れ

④教科学習との一致

（第三段階）学校生活・日常生活（気づき→振り返り）

日常生活や学校生活において、他者との関係の重要性に気づく学習

（第四段階）学校生活・日常生活・生涯学習（振り返り→行動）

子どもたちの内面に変化を起こし、意欲の向上につながり、その結果として現代の教育問題を改善するための学習となる